

井上円了と東アジア（一）井上円了の朝鮮巡講

著者	三浦 節夫
著者別名	miura setsuo
雑誌名	井上円了センター年報
号	23
ページ	83-124
発行年	2014-09-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00006907/

井上円了と東アジア(一)

井上円了の朝鮮巡講

三浦節夫
miura setsuo

一 先行研究

井上円了は六一年の生涯において二度の朝鮮巡講を行っている。第一回は明治三九年（一九〇六）で、「満韓紀行」と題して記録されている⁽¹⁾。第二回は大正五年（一九一六）で、「朝鮮巡講第一回（西鮮及中鮮）日誌」「朝鮮巡講第二回（南鮮及東鮮）日誌」「朝鮮巡講第三回（北鮮）日誌」と三回に分けて記録されている⁽²⁾。

この二度の朝鮮巡講について、すでに二つの先行研究がある。第一は朴慶植の「井上円了の朝鮮巡講の歴史的背景」である⁽³⁾。第二は許智香の「井上円了と朝鮮巡講、その歴史的位置について」である⁽⁴⁾。

在日朝鮮人の歴史研究者であった朴慶植の研究は、円了の二度の朝鮮巡講について、まずそのつどの歴史的政治的背景を取り上げている点に特徴がある。そして、円了の巡講日誌の内容を分析して、その問題点を明らかにし、とくに、徳富蘆花の朝鮮に対する見方と対比させて、円了の朝鮮巡講の取り組みを評価している。

一方の哲学や思想史の研究者である許智香の研究は、円了の巡講のうち、第二回の巡講について、当時掲載された雑誌によって講演内容を取り上げて分析した点に特徴がある。また、朴論文と異なる点は、円了の生涯の業

績を支えた思想と朝鮮巡講の思想を一貫したものとして位置づけようとしていることである。しかし、筆者の円了に関する研究のこれまでの知見からみると、許論文はいくつかの問題を孕んでいると考えられる。

許論文では、本文の冒頭で「実際、明治期の哲学受容史において、井上円了はそれほど重要な人物ではないと評されてきた」(5)と述べている。最近の研究では、柴田隆行は著書『哲学史成立の現場』において、円了の『哲学要領』前編を取り上げ、「こちらは日本人の手になる最初の西洋哲学通史である」(6)といい、小坂国継は著書『明治哲学の研究』において、「明治哲学史において「純正哲学」(形而上学)があらわれたのは、ようやく明治二〇年代以降になってからである。その代表的な思想家としては井上円了(一八五八—一九一九)、井上哲次郎(一八五五—一九四四)、清沢満之(一八六三—一九〇三)、西田幾多郎(一八七〇—一九四五)の名前をあげることができる」(7)と指摘している。円了の業績が改めて評価されているのではないだろうか。

また、許論文では、「井上円了は、「哲学」を用いつつ近代天皇制を支える「伝統イデオロギー」としての「仏教」を試みた点や、「哲学館」を下敷きにした全国修身教会運動を展開した点などからわかるように、「官学アカデミー」として「哲学」と国家との関係にもっとも敏感に対応していた知識人であった」(8)といい、「本稿では「国家」による学問の制度化の外側に存在しつつも、というより、そうであったからこそ二つの意味での「拡張」事業に情熱的に関わっていた井上円了に注目する。ここでの二つの意味としての「拡張」というのは、かれの「哲学堂」と、帝国日本の植民地主義を指し示す」(9)という。

許論文がいう「伝統イデオロギー」としての「仏教」、あるいは僧侶であるから「仏教のイデオログ」であったという位置づけに関しては、仏教学者の田村晃祐が著書『近代日本の仏教者たち』の中で、円了を「仏教の本質を求め」(10)た第一の代表者というものと異なる。あるいは、許論文の「哲学館」を下敷きにした全国

修身教会運動」というのは、事実と異なり、円了が本格的に修身教会運動を展開したのは、哲学館大学から引退した明治三十九年以降である。さらに、許論文という哲学堂の「拡張」は、修身教会運動における主たる目的（修身による社会教育）に継ぐもので、哲学堂の拡張はその従たる目的であったと考えられる（許論文は円了の哲学館大学の引退の原因である文部省と対立した「哲学館事件」にはまったく触れていない）。

許智香は、論文の結論として、「以上、本稿では、井上円了の「朝鮮巡講」に関する資料を取り上げ、かれの哲学に対する認識と国家主義的活動の関連性について考察した」（11）「かれが実現しようとした哲学は、このように「奮闘活動」する学であった。哲学館設立から修身教会運動まで、東京から朝鮮そして満州まで、かれは生涯において実に「奮闘活動」したのだ。しかし、われわれは、その「奮闘活動」とは別に、かれの発話が立っている場所を問わなければならないことを指摘することで、本稿を終えたい」（12）と述べている。

ライナ・シュルツァは「東洋大学における井上円了研究」（13）の中で、許智香の論文などに言及して、円了の国家主義に関する研究の必要性を指摘している一方で、哲学館の創立に関する円了の思想を、「哲学館開設ノ旨趣」と「哲学館開館旨趣」（14）にもとづいて明らかにしている。その思想が哲学にあったことを論証している。ところが、許論文は、哲学館の開館式の演説であり、ライナ・シュルツァが取り上げた「哲学館開館旨趣」を分析して、「その裏面にはより現実的な目的と課題があった」「もう一つの現実的な課題は、帝国大学との関係にあった。当時、西洋哲学を正規課程として教育する唯一の機関であった帝国大学に対して、学生募集を意識していたかれは「世間一般」に目を向ける」「このように井上円了は、哲学館を創立する時点から東本願寺に対する自分の位置と、私立学校の社会的地位に関して敏感に反応していた」（15）という。この分析には、円了が哲学館の創立において、「功利性」や「実利性」を「裏面」で重視していたと述べていると考えられる。この点につい

ては、純粹に哲學的認識の重要性から哲學館を創立したというライナ・シュルツアの論文と真つ向から対立している。

これまで、先行研究について検討してきたが、つぎに円了の朝鮮巡講について取り上げたい。なお、朝鮮巡講については、円了自身の日誌以外、本誌に発表された佐藤厚「井上円了の朝鮮巡講に関する資料」を参照した。

二 第二回の「満韓紀行」

円了が朝鮮で講演活動を行なう前に、日本と朝鮮の關係をどのようにみていたのか、円了の朝鮮に関する見方を示す論稿はない。周知のように、円了は明治二〇（一八八七）年に、現在の東洋大学の前身である私立学校「哲學館」を創立した。この創立事業を支えたのは、「哲學館の三恩人」と呼ばれた人々である。三恩人とは、加藤弘之、寺田福寿、勝海舟である。この中で、寺田福寿は円了と同じ東本願寺の僧侶で、慶応義塾に学び、福沢諭吉の信頼を得ていた人物である⁽¹⁶⁾。

この寺田福寿は、朝鮮の近代化に取り組んだ「金玉均」を福沢諭吉に紹介したことで知られている。その過程はつぎのように述べられている⁽¹⁷⁾。

「金玉均は、初期開化派の一翼を担った腹心の仏僧・李東仁（？）一八八一）を一八七八年六月にひそかに日本に派遣する。東本願寺釜山別院奥村円心の紹介で京都の東本願寺を訪れた李は、そのあと一八八〇年三月、東京の東本願寺別院に移り僧侶寺田（石亀）福寿を紹介され、その寺田のつてによって彼は福沢と連絡をつけることに成功したのである。大阪慶應義塾に学んだ経験のある寺田は、その縁で李を福沢に引き合

わせ、その後しばらく李は福沢邸を拠点に日本の事情を視察し、一八八〇年九月、朝鮮に帰国後その見聞を金玉均に報告した」

このような事前の準備のあと、一八八二年に金玉均は第一次日本訪問を行い、「途申京都まで遠路迎えに来た寺田福寿とともに、同年六月、東京に赴き、東京で日本の政治、経済、軍事等の施設を視察した。このとき金は三田の福沢邸を訪れている。これが福沢と金玉均の初対面となる。ちなみに、この年の三月十一日の『時事新報』の社説に「朝鮮の交際を論ず」と題する最初の朝鮮論が掲載されている。福沢の朝鮮問題への関心が急速に高まりつつあった時期である。」⁽¹⁸⁾

一八八四年一二月、朝鮮の革新に取り組む金玉均は、日本公使の協力を得て閔氏政権打倒のクーデター（甲申事変）を起こすが、失敗して日本へ亡命する。金の亡命生活を福沢や寺田は支援したという。

このような経験をした寺田は、円了に朝鮮問題を伝えなかったであろうか。円了の朝鮮観の形成に、寺田がかわった可能性があったと考えられないであろうか。

円了は明治三九（一九〇六）年一〇月末に韓国を訪れた。その講演旅行について記す前に、当時の日本と韓国の政治的情勢を紹介しておきたい。朴慶植はつぎのように述べている⁽¹⁹⁾。

「一九〇五年七月、日本はアメリカと「桂・タフト秘密協定」を、同年八月には「第二次日英同盟」を結んで、英・米との軍事同盟関係をつくっていった。同年九月、「日露講和条約」が締結され、日本は韓国において政治上、経済上、軍事上の卓越な利権を持っていること、また日本が韓国において必要と認める「指

導」「保護」及び「監理措置」をとることに干渉しないことをロシアに認めさせた」

「同年（一九〇五年、〔 〕は引用者。以下同じ。）十月、日本は「韓国保護権確立の件」の閣議決定（同年四月）をもとにさらにその実行に関する閣議決定を行い、これにもとづいて同年十一月十七日に「第二次日韓協約」（乙巳五条約、韓国保護条約）を、武力を背景に強制した……これによって韓国は外交権を完全に日本に奪われ、さらに韓国を「保護国」として内政をも監督する韓国総監府の設置を規定した。これは日本軍による漢城府、王宮などの制圧のもとに韓国皇帝、韓国政府を武力脅迫し、強制によって結ばせたもので、国際法上無効とされるものである。こうして韓国に対する日本の植民地政策が具体的にすすめられていくことになった」

「一九〇六年二月、前年末に決められた韓国総監府が設置され、同年三月に伊藤博文が第一代統監として赴任した。統監は天皇に直隸し、韓国の政治・軍事などに関する絶大な権限が与えられ、韓国内政への監督権を強化していった。こうして韓国政府は存在したものの、実権は韓国総監府が掌握していった」

円了の初めての「満韓紀行」はこのような日本の韓国総監府の初期に行われたが、この講演旅行は計画的に取り組まれたものではなかった。明治三九（一九〇六）年は、円了が哲学館大学長を引退し、修身教会運動に一教育者として取り組み、全国巡講を始めた年である。この年の四回目の巡講は七月八日からはじまり一〇月二十七日まで国内を巡講し、その継続として韓国へ渡ったのである。東京から四国、四国から佐賀県を巡講した。「それ

から朝鮮に渡りました、これは予定して居つたものではありませんでしたが長崎まで行つたものですから、今少しだとおもつて朝鮮に渡つたものであります。朝鮮に渡りますと、今一步進めて満州に入ろうと思ひ立ちました」(20) こうして、一〇月二八日に韓国の釜山に船で到着した円了は、「韓国の山には樹なく草なく、赤土を露出す、実に殺風景を極む」と感じた。宿坊は本願寺別院である。文末に円了の日誌にもとづいて、筆者は「朝鮮巡講一覽」を作成したが、釜山には、一〇月二八日から十一月一日まで六日間滞在し、談話・演説・講演を五回行った。つぎの京城には、十一月二日から六日まで五日間滞在し、演説を二回行った。京城から仁川に移り、十一月六日から七日まで二日間滞在し、演説を二回行った。最後の平壤には、十一月八日から九日の二日間滞在し、講演を一回行った。そして、新義州駅から満州へと、十一月一〇日に向かった。韓国滞在は二週間で、演説・講演は合わせて一回であった。この滞在の日誌を分析した朴慶植はつぎのように述べている(21)。

「釜山では哲学館出身の荒波平治郎が校長をしている開成学校で談話、同校の本校・分校には韓国人学生が三百余名もいて「実にさかんなりと謂ふべし」と悦に入っている。そして、荒波校長に次のような賛辞の漢詩を贈っているが、日本の朝鮮侵略に関しては何らの考慮もなかったように思われる。

「……多年辛苦のうえ、しだいにその功は実った。文明を掲げて日月を新たにし、八道のふるい山川を照らすのである」〔漢詩〕

「釜山から京城に至る途中の韓国人の家屋について「兼て聞きし如く豚小屋と異なる所なく、未開野蛮の居宅であるが、唯驚くのは斯る矮小の家屋に住しながら、人の体格の意外に長大なる一条である」……木を

見て森を見ざる偏見と、優越感から同情を寄せている」

「要するに韓人は数百年間、何等の進歩もなく、久しく悪政の下に圧せられて、唯、旧慣を固守し、其日暮らしの境界を送るに過ぎぬ、……万物の靈長たる人間としては実に憐れむべきものと思ふ、斯る人に人間の靈知靈能あることを知らしめ、人格の如何、天職の如何を知らしむるの務は余は日本人の任であると信じて居ます」とし、日本の朝鮮侵略と植民地支配を合理化する見解を述べていると思われる」

「次に朝鮮人の道徳について「朝鮮人は概して道徳の觀念に乏しいといふことを聞いて居る、人に対して虚言を吐くなどは当り前の様に思ふて居ることじや、是れはツマリ今日まで教育も宗教も欠けて居る為であることは明かである」と言っているが、これは偏見の最たるものと言わざるを得ない。井上の發言は何らの調査もなく、他からの偏見の受け売りでしかない。この發言は日本の侵略者にそっくりお返ししたい内容であると思う」

「井上は十一月二日京城に到着、翌三日、韓国統監府總務長官鶴原貞吉、同部長木内重四郎、同理事官三浦弥五郎、同軍政部黒田太久馬らを訪問、当日は「天長節」〔明治天皇の誕生日〕とあつて次のような天皇崇拜思想、朝鮮人への「皇恩の恵み」をうたっているが、日本人はともかく、朝鮮人にとっての天皇は不倶戴天の敵であつた。井上の思想はこの天皇崇拜思想が根幹にあるのであろうか？

「天長節の今日は朝鮮に喜びの顔が多く、この異邦もまたわが皇恩の恵みをこうむっているのだ。朝から

天皇の長寿を祝わんとし、料理は清国と朝鮮、酒は日本酒で祝宴を開いたのである。」〔漢詩〕

平壤で詠まれた漢詩の一部には、「……韓国の人はむやみに儀礼を誇りにしているのだが、ある種の臭気が家にたちこめ、その衣服もまたなまぐさい。〔漢詩〕と皮想的な見方に終始している」

円了は十一月一日に満州に向かい、同月二十九日に東京に帰っている。円了の朝鮮に対する見方は、すでに朴慶植が指摘しているように、日清戦争・日露戦争の戦勝国のものであり、日本の韓国統監府という支配者の側に立つものであった。

三 第二回の朝鮮巡講

円了は一九一八年、すなわち「大正七年五月、朝鮮総督府より十三道国民道徳講話囑托の命を拝受し、二十四日（金曜）晴、朝八時半の特急に駕して鮮地向」〔22〕つた。第一回の朝鮮での講演から二年が経過していたし、今回は前回のような旅行の続きではなく、朝鮮総督府からの依頼という明確な目的意識と計画によるものであった。この時期の日本と朝鮮の政治的関係について、朴慶植はつぎのように述べている〔23〕。

「同年〔一九一〇年〕八月十六日、寺内統監は李完用内閣に「併合条約案」「併合覚書」を手交、閣議では学部大臣李容植が反対したが、同月二十二日に「韓国併合に関する条約」が李完用、寺内正毅署名の下に調印された。しかし、朝鮮人民の反対をおそれ、同月二十五日警務総監部では政治的集会、屋外民衆集会を禁

止する「集會取締に関する件」を公布し、同月二十九日「韓国併合に関する条約」を公布した。同時に大韓帝国は「朝鮮」となり、朝鮮總督府が設置された。

「韓国併合条約」の前文には「相互ノ幸福ヲ増進シ東洋ノ平和ヲ永久ニ確保センコトヲ欲シ此ノ目的ヲ達成セシムガ為ニハ韓国ヲ日本帝国ニ併合スルニ如カザルコトヲ確信シ」とし、その第一条に「韓国皇帝陛下ハ韓国全部ニ関スル一切ノ統治權ヲ完全且永久ニ日本帝国皇帝陛下ニ譲与ス」、第二条に「日本国皇帝陛下ハ前条ニ掲ゲラレタル譲与ヲ受諾シ且全然韓国ヲ日本帝国ニ併合スルコトヲ承諾ス」としている。

この「併合条約」は武力の威嚇の下に強制した第一次、第二次、第三次「日韓協約」を土台にしてつくられたもので、……全くの武力占領に外ならなかったのであり、これまた国際法上無効であるといえよう」

「一九一〇年以前、日本の商業資本家が朝鮮の都市、開港場に進出して朝鮮人商業を圧迫した。日本商人は砂金、毛皮、人參、米穀などを安価で買い入れ、日本から棉布、藥品、雜貨などを高く売りつけた。日本の雜貨商、旅館・料理屋營業、高利貸業者が各都市に出現していった。また日本資本は京釜線などの主要鉄道の敷設、財政顧問目賀田種太郎による韓国における貨幣整理を強行し、韓国の貨幣制度を日本に從属させた。そしてその実務者の第一銀行が韓国の中央金融機関となり、第一銀行券を兌換券として無制限に發行、韓国支配の經濟的基盤を築いた。

日本資本は初期、精米業、食品加工業、皮革・煙草製造業に進出した。

日本は一九一〇年十二月「会社令」を公布して朝鮮における会社の設立を許可制とし、朝鮮工業の發展を抑圧した。朝鮮は米を中心とする食料品および工業原料の供給地、日本商品の販売市場として、一九一〇—

二〇年代には略奪貿易による植民地収奪が強行されていた」⁽²⁴⁾

このような時期に円了は朝鮮全土を巡講する。五月二五日に下関から朝鮮の釜山に到着し、直ちに京城に向かった。翌日京城に到着した円了は、「余は明治三十九年総監府時代に初めて朝鮮を歴遊せしが、其當時に比するに京城だけにても別天地の觀を呈し、郵便局附近の如きは東洋の小巴里なるかを思はしむ。」⁽²⁵⁾と日誌に記しているが、朴慶植は「朝鮮総督府による「武断政治」を高く評価している」⁽²⁶⁾と述べている。

文末の「朝鮮巡講一覽」に見られるように、五月二七日より京城で巡講を開始し、五月三〇日から六月九日まででは西朝鮮を、六月一〇日から六月一二日までは中朝鮮を、六月一二日から六月二五日までは南朝鮮を、六月二五日から七月三日までは東朝鮮を、七月四日から七月一八日までは北朝鮮を巡講した。釜山から入国し、釜山から出国したが、日数は合わせて五六日に及んだ。この間に円了は、「十三道十一府二十六郡三十面里九十一ヶ所百十六席聴衆三万五千九百十人」⁽²⁷⁾の巡講を行った。円了の日誌にもとづいて巡講地を○で囲み作成したのが、つぎの「朝鮮巡講地図」⁽²⁸⁾である。この地図をみると、円了の巡講が朝鮮全土で開催されたことが一目瞭然である。また、円了がまとめた「朝鮮全道開會一覽」⁽²⁹⁾をもとに筆者が作成し、日本の全国巡講と比較したものが、つぎの「朝鮮巡講統計」である。

この「朝鮮巡講統計」をみると、円了の巡講の全体が理解できる。第一は、「巡講の会場」であるが、「小学校」がもっとも多く四一％で、つぎが「寺院」「その他」とともに二三％である。「他の学校」は一二％である。学校関係を合わせると、五三％と半数を超えている。これを日本と比較してみると、学校関係の割合は五〇％台と同じで、「寺院」は一〇ポイント日本よりも少なく、代わりに「その他」が日本より一〇ポイント以上多くを

朝鮮巡講統計（大正 7・1916 年）

巡講の会場

	寺院	小学校	他の学校	その他	合計
朝鮮	21	38	11	21	91
	23.1	41.8	12.1	23.1	100.0
日本	36.5	45.9	7.9	9.7	100.0

巡講の主催者

	教育関係	町村有志	諸団体	仏教関係	組織連合	自治体	合計
朝鮮	18	6	20	8	9	30	91
	19.8	6.6	22.0	8.8	9.9	33.0	100.0
日本	27.0	17.8	17.7	10.2	11.1	16.1	100.0

演題類別

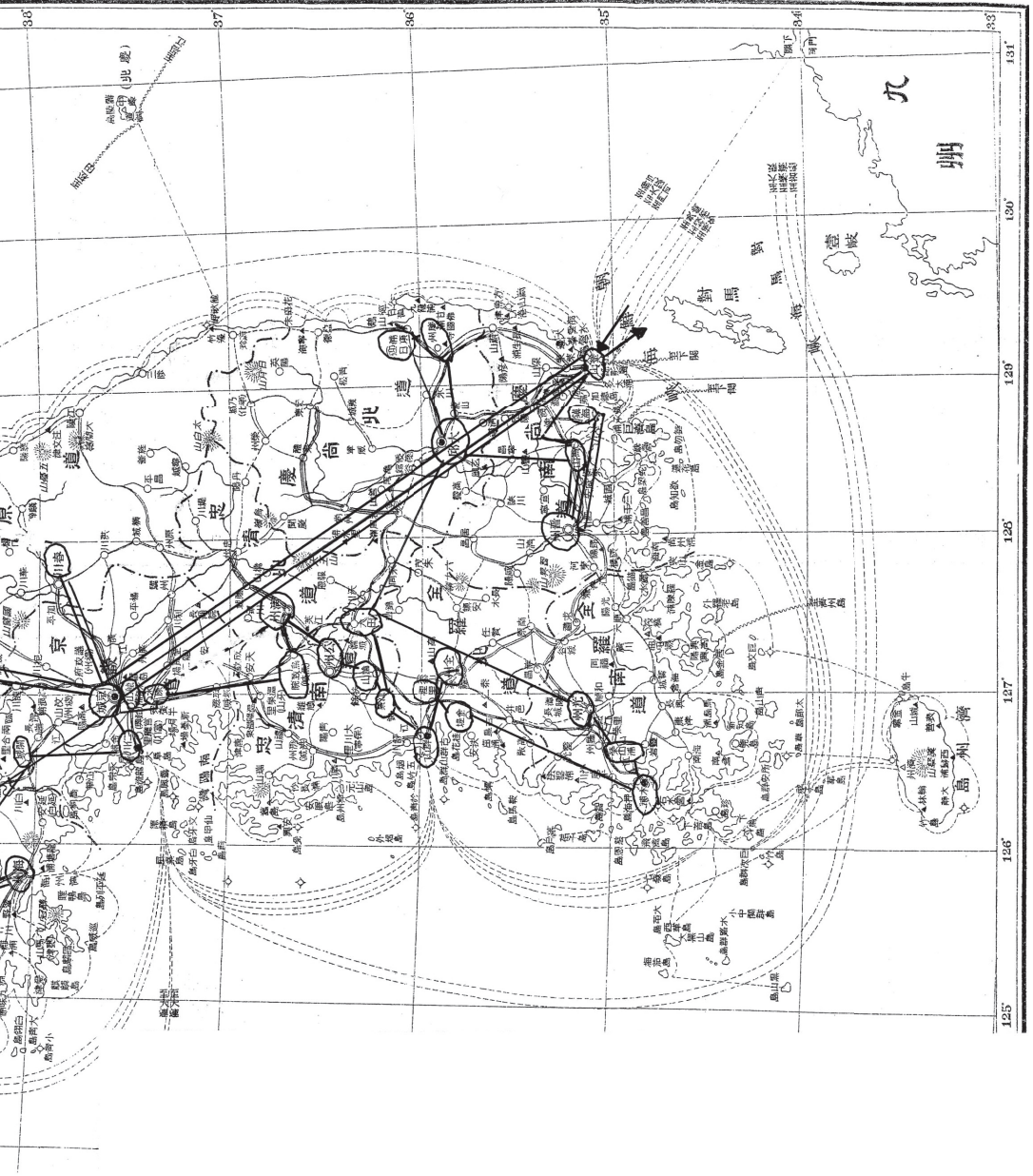
	詔勅修身	妖怪迷信	哲学宗教	教育	実業	雑題	合計
朝鮮	75	20	14	4	1	2	116
	64.7	17.2	12.1	3.4	0.9	1.7	100.0
日本	40.8	23.6	15.4	7.9	6.8	5.4	100.0

巡講の聴衆

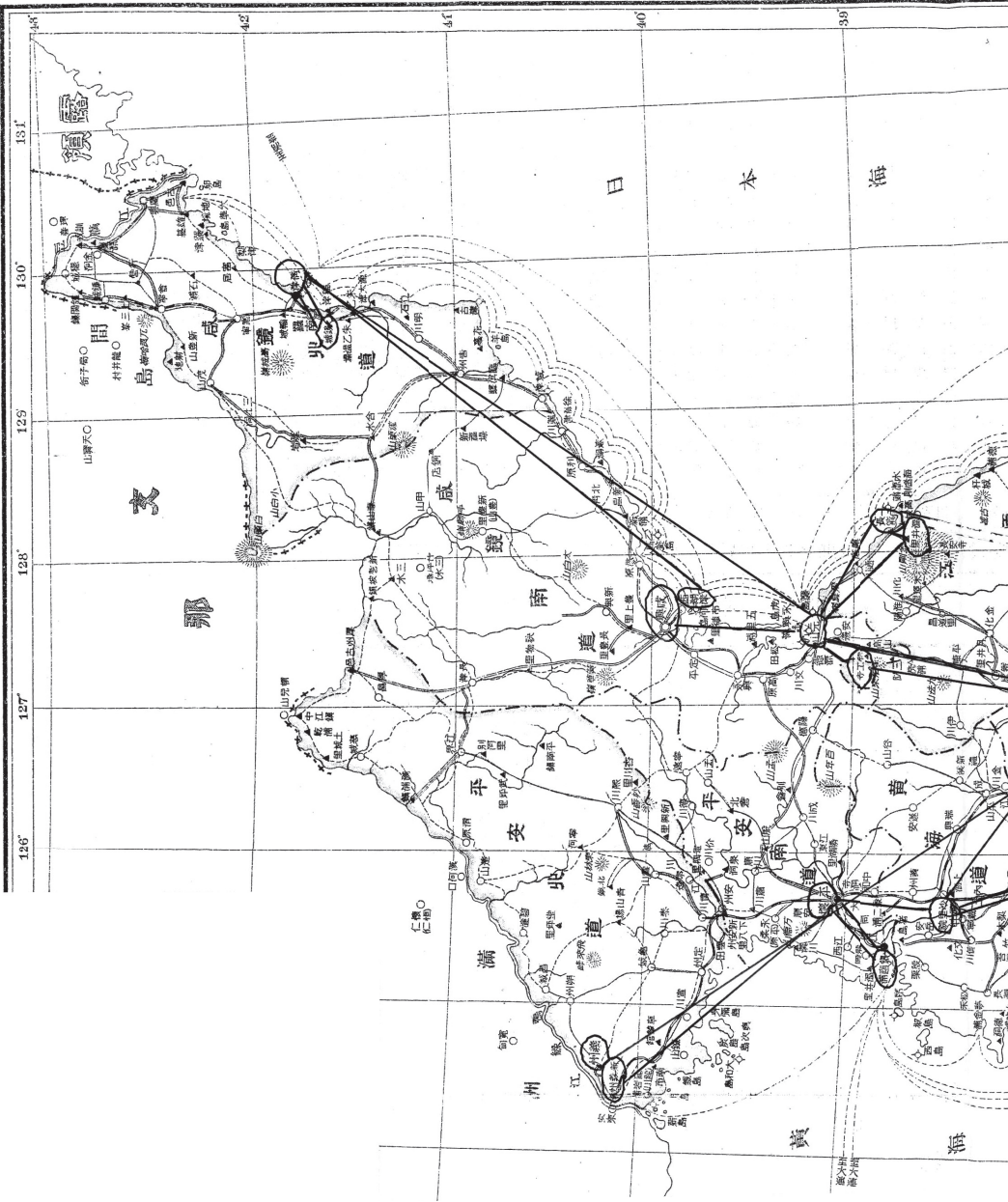
	朝鮮人	日本人	合計	1 回平均
実数	5100	30810	35910	395
%	14.2	85.8	100.0	

註 この統計は、井上円了『南船北馬集』第 16 編、112 頁～118 頁と『井上円了選集』第 15 巻、496 頁～498 頁で作成した。日本は全国巡講の平均である。

占めている。
 第二の「巡講の主催者」をみると、とくに半数を超えたものはない。「自治体」が三三%、「諸団体」が二二%、「教育関係」が二〇%、「組織連合」が一〇%、「仏教関係」が九%、「町村有志」が七%となっている。日本との比較で目立つ点は、「自治体」が日本より多く、「町村有志」が日本より少ないことである。円了の朝鮮巡講が朝鮮総督府という「上からの依頼」であったことがここに明らかになって



朝鮮巡講地図



いると考えられる。

第三の「演題類別」をみると、「詔勅修身」がもっとも多く六五%である。つぎが「妖怪迷信」の一七%、「哲学宗教」の一二%で、「詔勅修身」と大差がついている。その他の「教育」「雑題」「実業」は合わせても一〇%未満である。日本との比較で目立つ点は、やはり「詔勅修身」が高いことで、日本より二五ポイント上回っている。これは朝鮮総督府の「国民道德講話」という依頼に、円了は忠実に従ったからであろう。その意味で、円了の巡講は「官製」によるものであった。

第四は「巡講の聴衆」である。合計で約三万六千人であるが、これを日本人と朝鮮人に分けると、日本人が三万八一〇人（円了は「内地人」と呼んでいる）で八六%を占め、朝鮮人は五一〇〇人で一四%と少ない。一回の聴衆の平均は三九九人となっている。

では、具体的には円了がどのような講演をおこなったのであろうか。許智香の論文では『朝鮮及満州』掲載の講演記事が引用されている⁽³⁰⁾。佐藤厚「井上円了の朝鮮巡講に関する資料」⁽³¹⁾は、許論文が取り上げた記事以外に、『皇城新聞』『毎日申報』『朝鮮新報』『京城日報』の記事があり、当時の講演内容が明らかにされているので参照されたい。すでに、前述の統計の「演題類別」で述べたように、講演は「詔勅修身」「妖怪迷信」で、特に前者の「詔勅修身」が多かった。さて、佐藤厚の収集した当時の朝鮮の新聞記事を見ると、妖怪学関係は「心理的妖怪」（『毎日申報』、『京城日報』）と「迷信論」（『朝鮮新報』）がある。国民道德関係では「鮮人同化論」「教育万能主義」（『毎日申報』）があり、「国民道德の大綱」（『朝鮮及満州』）がある。ここでは、後者の「国民道德の大綱」を取り上げておこう⁽³²⁾。

この「国民道德の大綱」は、大正七（一九一八）年五月二六日に京城高等女学校の講堂で行われたものであ

る。この講演の要点をまとめて列挙しておこう。第一点は、「我が国民道徳」、先帝の教育勅語と戊申詔書の二大勅語に根本があり、「苟も帝国の臣民たるものは此の千古不磨の大遺訓を遵法して帝国の發展向上をはからなければならぬ」という。第二点は、現在の西洋の文明は満開状態、これに對して東洋の文明は衰退瀕死の状態であるが、この間にあつて「屹立して西洋の文華と美を競いつゝあるものは独り我が帝国あるのみである」「東洋に於けるあらゆる責任は悉く日本に懸かつて居る」という。第三点は、「我が国体の尊嚴を維持し来れる原動力は何にあるか云へば忠孝の二道である」「西洋人の国家に對する根本觀念「利己主義」は吾人日本国民が国家に對する觀念とは全然異なつて居る、忠君愛国の精神思想は其出發点を異にして居る」（同じ東洋でも中国と日本では思想に大きな差異があり、中国の国民性は感心すべきではない）という。第四点は、日本人の心には大義があり、これが日本の精華であり、これが忠孝となつて、日本民族の特色であるが、西洋人は愛国心の涵養に苦心している。我が国は先の二大勅語を「信条として進まねばならない、今や日本と朝鮮とは合併されて一國となつたが元來國名より日韓は一つである」という。「今や此の兩國は合邦し一國と化して光榮ある万世一系の天皇陛下を奉戴し御稜威の下に東洋の文明を發達せしめ、東亞民族の興隆を企図し世界の文明に貢獻せねばならぬ」という。

円了の朝鮮巡講の日誌には、同じ趣旨のことが述べられている。

「今日の朝鮮の道路は内地以上にして、自動車が縦横に奔走するを得、又各都會には水道の設備ありて、飲用水の不便なく、又電灯電話の行渡れるが如きは皆朝鮮合併の余沢ならざるはなし、学校教育の普及も、生命財産の安全も、皆其余慶なり、鮮人に於ては其恩恵を心頭に銘して、之に報答する所以を思はざるべか

らず」(33)

「合併以来悪政は善政と一変し、人民始めて其堵に安んずるを得たり、朝鮮人たるもの永く此恵沢を忘れざらんことを望む、余は各会場に述べて曰く、日本の名は旭日なり、朝鮮の名は朝はアサ、鮮はアザヤカ、即ち朝の景色なり、此景色は旭日によりて生するものにして、若し旭日なかりせば朝鮮は無意味となるべし」(34)

円了は朝鮮を植民地化した日本を賛美する論理を展開するばかりである。朴慶植はこうした円了の朝鮮巡講をつぎのように総括している(35)。

「井上円了はヨーロッパの近代化にならって日本社会の近代化の確立を念願し、教育勅語に示す国民道徳を目標に啓蒙運動、修身教会運動を展開していった。井上円了の日本内の巡講では「官学」に対する「田学」という民衆的立場から近代的啓蒙運動に一定の役割を果たしていると思う。

しかし朝鮮人に対しては民族の存在とその主体性は全然考慮に入れず、それを否定して、日本への同化という日本政府の朝鮮植民地政策に追従していったように思える。井上の朝鮮巡講は朝鮮総督府官憲らによる組織・動員によって遂行されたことからそのようにいえるであろう。これは井上円了に限らず、当時の日本の大部分のイデオログがそうであったが、井上はその代表的人物の一人といえよう」

【註】

- (1) 井上円了『滿韓紀行』（井上円了『南船北馬集』第一編）六四〇七七頁。
- (2) 井上円了「朝鮮巡講第一回（西鮮及中鮮）」日誌（井上円了『南船北馬集』第一五編）一〇三〇一六頁。井上円了「朝鮮巡講第二回（南鮮及東鮮）」日誌（井上円了『南船北馬集』第一五編）一一六〇一三〇頁。井上円了「朝鮮巡講第三回（北鮮）」日誌（井上円了『南船北馬集』第一六編）一二八頁、（同書は『井上円了研究』第三号の九一〇一八頁に所収されている）。
- (3) 朴慶植「井上円了の朝鮮巡講の歴史的背景」（『井上円了研究』第七号）八一〇一〇七頁。
- (4) 許智香「井上円了と朝鮮巡講、その歴史的 위치について」（『日本思想史学』第四五号）一四六〇一六一頁。
- (5) 許智香、前掲論文、一四六頁。
- (6) 柴田隆行『哲学史成立の現場』弘文堂、一九九七年、七八頁。
- (7) 小坂国繼『明治哲学の研究』岩波書店、二〇一三年、二九七〇二九八頁。
- (8) 許智香、前掲論文、一四六〇一四七頁。
- (9) 許智香、前掲論文、一四七頁。
- (10) 田村晃祐『近代日本の仏教者たち』日本放送出版協会、二〇〇五年、七二頁。
- (11) 許智香、前掲論文、一五七頁。
- (12) 同右、一五七〇一五八頁。
- (13) ライナ・シュルツァ「東洋大学における井上円了研究」（『国際井上円了研究』第2号）一八一〇一九九頁参照。
- (14) 井上円了「哲学館開設ノ旨趣」（『東洋大学百年史』資料編 Ⅰ・上）八三〇八四頁。井上円了「哲学館開設館旨趣」（同書同編）八九〇九三頁。
- (15) 許智香、前掲論文、一四八〇一四九頁。
- (16) 拙稿「福沢諭吉・井上円了・寺田福寿・小栗栖香頂」（『福澤諭吉年鑑』第二三号）参照（なお、同論文は『井上円了研究』第七号にも収録されている）。
- (17) 猪木武徳「大阪慶應義塾が福沢諭吉と金玉均を結びつけたのか」（『近代日本研究』第二七号）七頁。福沢と金の関

係については、姜健栄『開化派リーダーたちの日本亡命―金玉均・朴泳孝・徐載弼の足跡を辿る』飛鳥社、二〇〇六年や金秉洞『金玉均と日本―その滞日の軌跡』緑蔭書房、一九九一年を参照。

(18) 猪木武徳、前掲論文、八頁。

(19) 朴慶植、前掲論文、八二～八三頁。

(20) 井上円了「滿韓旅行談」(『東洋哲学』第一四卷第一号) 五一～五五頁。

(21) 朴慶植、前掲論文、八四～八七頁。同文の漢詩の口語訳は新田幸治によるものである。朴論文には、日誌の他に、

井上円了「朝鮮旅行談」(『修身』第四卷第一号) が資料となっている。この「滿韓紀行」についての円了の談話については註(20)の「滿韓旅行談」、井上円了「朝鮮旅行談」(『護法』第二〇号第五号、二一～二五頁) がある。

(22) 井上円了「朝鮮巡講第一回(西鮮及中鮮)」日誌(前掲書) 一〇三頁。

(23) 朴慶植、前掲論文、九〇～九一頁。

(24) 同右、九三頁。

(25) 井上円了「朝鮮巡講第一回(西鮮及中鮮)」日誌(前掲書) 一〇四頁。

(26) 朴慶植、前掲論文、九五頁。

(27) 井上円了「朝鮮巡講第三回(北鮮)」日誌(前掲書) 二八頁。

(28) 原図は、『チョウセン イチラン』朝鮮総督府、大正二年(一九二二)の地図である。

(29) 井上円了「朝鮮巡講第三回(北鮮)」日誌(前掲書) 二二～二八頁。

(30) 許智香、前掲論文、一五六～一五七頁。

(31) 佐藤厚「井上円了の朝鮮巡講に関する資料」(本誌) 一二五～二〇八頁。

(32) 同右、一七〇～一七四頁。

(33) 井上円了「朝鮮巡講第三回(北鮮)」日誌(前掲書) 一八頁。

(34) 同右、二一頁。

朴慶植、前掲論文、一〇五頁。円了の同化論では、「同化問題の第一は言語の普及である。鮮人は語学の天才を有する点は実に驚くべきものである。普通学校に入り、始めて内地語を学び、半年を経過すれば、自由に国語を聞解

し、かつ自在に対話ができるというのが、もし分教場的書堂を置き、書堂に在った当時から内地語を学ぶようにすれば、国語の普及に一層の進歩を見るのはもちろんであり、これに加え、教育を普及して鮮人の知見を進めるようにすれば、始めて文明の恵沢の感謝を自覚するに至り、併合前と併合後の相違も能く識別し、衷心から内地に向かつて感謝を呈するようになるのは疑いない」(佐藤厚「井上円了の朝鮮巡講に関する資料」(本誌)一九六頁)という。明治二〇年代に日本主義を唱え、日本の独立を論じた円了は、その精神を独立させるには、歴史、言語、宗教の主体性を主張した。朝鮮巡講には、その時代の思想的問題はまったく顧みられていない。

朝鮮巡講一覧

第1回 清韓紀行 (1906年・明治39年)

月	日	区分	出発	到着	地名	発起、主催者	場所	対象	その他
10	28	移動、宿舎	対州	朝鮮国 釜山	釜山				歓迎：新潟県人 小倉 良八、内山堅造、澁川幽遠、 等10余名 哲学館出身者：荒浪の ほか、春日隆英、上原三四 郎、鎌田政秀 等
10	29	開会 (談話)			釜山	発起：別院輪番 井上 香憲、開成学校長 荒浪平 治郎、理事官 松井茂を始 め70有余名		韓国人	
10	30		訪問、饗応		釜山				小倉良八 宅
10	30		演説		釜山		尋常小学校 講堂	聴衆講堂に 溢れる	
10	31		一言		釜山			幼稚園児童	
10	31	談話			釜山	教育会	尋常校		校長は、鈴木總次郎
11	1	開会			釜山		本願寺別院		当地にて尽力：井上・荒浪、 鹽谷 (塩谷) 法律、小倉良 八 等
11	2	移動、宿舎	釜山 草梁駅	京城	京城				哲学館出身者 林大行に迎 えられる
11	3	訪問			京城				総監府長官 鶴原定吉、部 長 木内重四郎、理事官 三浦彌五郎、軍政部 黒田 太久馬 を訪問

11	3	祝宴			京城			別院において祝宴に加わる 別院輪番 井波潜影の厚 意
11	3	寺詣			京城			音羽の案内にて、開運寺 に詣す
11	4	訪問、饗応			京城			韓国財政顧問 目賀田種太 郎 宅
11	4	演説			京城	発起者：井波潜影、和田常平、横山孫三、俵孫一、黒田太久馬、山口太兵衛、菊池謙讓、三浦彌五郎、森勝次 等	女兒小学校	
11	5	訪問			京城			黒田太久馬 宅
11	5	開会、演説			京城		別院終南山 下和城台	演説後茶話会あり 輪番井 波潜影
11	6	拝観			京城			宮城内を拝観
11	6	移動、宿舎	京城	仁川	仁川			
11	6	開会			仁川	主催：各宗寺院		別院輪番 大幸頼慧
11	7	開会			仁川	発起人：民長、校長、市内の有志数十名	仁川倶楽部	
11	7	茶話会			仁川		別院	講演後別院にて茶話会 当地の尽力者：大幸輪番、太田吉太郎、野口彌三、堀力太郎、松本鱧三郎（校長）、關岡、末永、板倉、諸岡、倉田 等

11	8	移動、宿舎	仁川	平壤	平壤				途中 随行菊地適 と相分 る 警部 是澤真一郎が迎える
11	9	巡覧			平壤				警部 林和一の案内 箕子廟、忠魂碑、牡丹台、 玄武門、永明寺、清流壁 等
11	9	開演			平壤	主催者：理事官 菊地武 一、警視 平渡信、民長馬 場晴利、旭布瀛、朝枝誠 實、眞藤義雄 等	日語学校		
11	10	移動、宿舎	平壤	新義州 駅	義州、 安東県				領事館警部 堺田駒藏、本 願寺布教師 和田祐意、民 役所 成田定 等数名の歡 迎

第2回 朝鮮巡講 (1918年・大正7年)
西朝鮮・中朝鮮

月	日	区分	出発	到着	地名	発起、主催者	場所	対象	その他
5	24	移動	特急						
5	25	移動	下関	釜山					博文堂主 吉田市次郎 宅 にて休憩
5	26	移動、宿舎	釜山	京城南 大門駅					京畿道長官 松永武吉 数 人歓迎

5	26	訪問			京城			旧哲学館出身 朝鮮及満州 雜誌社長 釋尾春苐 の案 内により、 官邸に、長谷川總督、山縣 政務總官、を訪問
5	26	講話			京城	依頼 ： 愛国婦人会 主事 大橋次郎	本願寺別院	
5	26	講話			京城	主催 ： 朝鮮教育研究 会、京城日報社及満州社 発起 ： 学務課長 弓削 幸太郎、日報社長 阿部充 家、釋尾	高等女学校	
5	27	面会			京城			学務課編輯官 立槻教俊 の案内により、總督府にて、 弓削学務課長 等と面会
5	27	講話			京城	依頼 ： 高等女学校長 成田忠良	高等女学校	高等女学校 生徒
5	27	訪問			京城			松永長官の官舎を訪問
5	27	講話			京城		高等普通学 校	校長 岡元輔 教授を參觀
5	27	巡覽			京城			旧哲学館出身 中樞院囑託 荒浪平治郎 の案内により、 奎章閣、景福宮 を巡覽

5	27	講話				京城		龍山鉄道倶楽部		工務課長 川江秀雄 出席あり
5	27	饗応				京城				朝鮮ホテルにて、官民有志約二十名会食
5	28	講話				京城		京城中学校校長 福島亦八		龍山中学校も出席あり 京城校長 柴崎鐵吉、龍山校長 福島亦八
5	28	講話				京城		警察練習部		所長 警視 松井信助
5	28	出演				京城				東本願寺別院主催の追吊会に出席 輪番 湊内式恵（朝鮮布教の監督）は全道紹介の労を取る
5	28	講話				京城		逋信局		局長 持地六三郎 も出席
5	29	喫飯								釋尾 宅にて喫飯
5	29	拝観				京城				釋尾 と共に 昌徳宮、工業専門学校 工業専門学校長は 農学博士豊永眞里

5	29	撮影			京城			朝鮮ホテル庭前 立柄教 俊、荒浪平治郎、釋尾春房、 湊内弋恵、石塚藤太郎（京 城中学校教諭）、眞邊築次 （京城女子普通学校長）、藤 原敬一（中学校教諭）、村 島雄（村島商店主） 「京北出身鮮人 楊在柯の 不参加遺憾」
5	29	講話			京城		偕行社	
5	29	晚餐			京城			松川司令官 官邸
5	29	（謝意）			京城			「立花師団長より其部内へ の紹介」
5	29	移動	京城	（夜行）				偶然同室 侯爵 前田利為
5	30	移動、宿舎		平安北 道新義 州府				
5	30	講話			新義州	発起 : 府尹（府長） 石原留吉、銀行 加藤鐵次 郎、大谷派布教師 松江賢 哲、等	小学校	
5	31	移動、会食	新義州	義州				平安北道長官 藤川利三 と会食、公園を一覧

5	31	開演			義州	発起：道庁 江田重雄、吉永貞、義州面長 鈴木運次郎	公会堂		
5	31	移動	義州	新義州					
6	1	移動	新義州	平安南道平壤府					
6	1	講演			平壤		中学校		校長 赤木萬次
6	1	講演			平壤		高等普通学校		校長 田中玄黄
6	1	談話			平壤		東本願寺反布教所		主任 竹林登
6	2	講演			平壤	依頼：平安南道教育会会長 篠田治策	平壤小学校		長官 工藤英一 出席
6	2	巡覧、晚餐			平壤				牡丹台、等 工藤長官を始め、7～8名 で晚餐
6	2	講演会に出席			平壤	京城日報主催	浄土宗華頂寺	聴衆堂内に溢る	
6	3	講話			平壤		女子高等普通学校	朝鮮女生徒	校長 齋藤欽二
6	3	移動、宿舍	平壤府	鎮南浦府					歓迎：府尹（府長） 深川傳次郎、商業会議所会 頭 富田儀作、東本願寺布 教師 朝倉慶友、等数十名

6	3	晩餐			鎮南浦		主催：深川府尹（府長）を始め、官民有志	商業会議所		三和花園（富田所有）にて、有志諸氏と晩餐
6	3	開演			鎮南浦		主催：婦人修養及道の会	東本願寺布教所		
6	4	開演			鎮南浦					
6	4	移動	鎮南浦府	平壤						
6	4	講演			平壤			高等女学校	愛国婦人会	女学校長 上野直記
6	4	饗応			平壤					京北出身者 飯田宇作 宅
6	4	講話			平壤		主催：岡村正確	鉄道倶楽部		平壤にて奔走の旁：道庁学務掛 辻右作、竹林布教師
6	5	移動	平壤	黄海道沙里院駅						休憩所 宮本旅館
6	5	（開会）			沙里院		発起：西島新造、永田良然、本山文男、等	倶楽部		
6	5	移動、宿舍	沙里院	黄海道海州						
6	6	講演			海州		発起：道事務官 富永文一、海州郡守 全定鉉、道書記 伊藤英一、有志 松倉重貞、大河内俊平、等	芙蓉館	朝鮮人	「午前朝鮮人の為に午後内地人の為に」

6	6	講演			海州	発起 : 道事務官 富永文一、海州郡守 全定鉉、道書記 伊藤英一、有志松倉重貞、大河内俊平、等	芙蓉館	内地人	「午前朝鮮人の為に午後内地人の為に」
6	7	移動、宿舍	海州	京畿道 開城					
6	8	「立寄る」			開城				「私立開城学堂に立寄る、生徒百名以上あり」
6	8	登覧			開城				警察署長 森脇英士 の案内により、高麗遺跡満月城を登覧
6	8	開演			開城	発起 : 郡主 金龍尚、警察署長 森脇英士、軍人会長 宮崎金蔵、郡書記 山崎三郎、小学校長 坪内英俊	小学校	内地人	「先に内地人次に朝鮮人に対して開演す」
6	8	開演			開城	発起 : 郡主 金龍尚、警察署長 森脇英士、軍人会長 宮崎金蔵、郡書記 山崎三郎、小学校長 坪内英俊	小学校	朝鮮人	「先に内地人次に朝鮮人に対して開演す」
6	8	移動	開城	仁川府					
6	8	開演			仁川		本願寺別院	愛国婦人会	尽力 : 輪番 宮永六雄
6	9	講演			仁川		小学校	中学生及内地人	

6	9	午餐			仁川				府尹（府長） 楠野 俊成 官邸
6	9	講演			仁川		別院	婦人会	
6	9	講演			仁川	当地開会発起人：女学校長 和田英正、商業学校長 伊藤最一、多賀善介、宮小学校長 小島訂次郎、宮永輪番	商業学校	朝鮮人	
6	9	移動、宿舍	仁川	京城					
6	9	饗応		京城					關屋学務局長 宅
6	10	移動、宿舍	京城	江原道 首府春川					
6	10	講話			春川		普通学校	朝鮮人	
6	10	（見学）			春川				「昭陽亭を一覧す」
6	10	講演			春川	発起：事務官 須藤素、宮崎又治郎、警察署長 鈴木貢、東本願寺布教師 猪原現眼、等	普通校	内地人	
6	10	歓迎会			春川				「淡路館の歓迎会に出席す」
6	11	移動	春川	京城					
6	11	講話			京城		進明女子高等女学校		校長 嚴俊源、副校長 小杉 彦治

6	11	(見学)		京城				「淑明女子高等普通学校に至りて新築校舎を一覧」校長 淵澤ノエ子
6	11	移動、宿舍	南大門	京畿道 水原				
6	12	開演		水原	発起：面長 近藤虎之助、代書業 宮永幾太郎、布教所主任 長崎阿彌也、総督府勸業係 鏡保之助、等	劇場 豊昌館		

南朝鮮・東朝鮮

月	日	区分	出発	到着	地名	発起、主催者	場所	対象	その他
6	12	移動	水原	燕岐郡 烏致院					
6	13	移動	烏致院	忠清北 道清洲					
6	13	講演			清洲		清洲小学校		
6	13	歓迎会			清洲				ホヘト料理店の歓迎会 官民数十名 米国宣教師二名
6	14	講話			清洲	当地の発起人：道長 官張蠶恒、事務官 齋藏禮三、井上主計、警部 前田良太、郡守 申昌休、等	普通学校	朝鮮人	

6	14	来訪			清洲			朝鮮人禪僧 白初月 来訪あり
6	14	移動	清洲	忠清南道鳥致院				
6	14	(開会)		鳥致院	面長 竹下剛、郡守 高義駿、布教師 高木、等	東本願寺布教所		
6	14	移動、宿舍	鳥致院	忠清南道公州				
6	14	開演		公州	依頼 : 布教師 東野安隆	東本願寺布教所		
6	15	講話		公州		小学校	朝鮮人	
6	15	会食		公州				道庁内の食堂にて 道長官 上林敬次郎、第一部長 澁谷谷元 と会食
6	15	講演		公州	発起 : 小学校長 高田誠二、農学校長 岡林契梨彌、普通学校長 小松兼吉、面長 川崎平太郎	普通学校	内地人	
6	15	移動、宿舍	公州	論山				其餘を見学 英餘郡守 安琦善、憲兵分隊長 畠山穆雄 当地開会に尽力 : 布教師 釜田法章

6	16	開演			論山	発起：釜田、佐々木將多、富村六郎、藤本忠次、梶原菊造、等	小学校		
6	16	拝観			論山				灌燭寺 拝観
6	16	移動、宿舍	論山	江景					
6	16	開演		江景	発起：杉田鍛雄、武政正明、小林保	劇場大正座			
6	17	移動	江景	全羅北道沃溝郡黄登					同郷人 片桐和三宅にて休憩
6	17	開演		黄登		小学校			
6	17	開演		瑞穂面瑞穂里	当地開会主催：川崎藤太郎（円了と郷里が同じ）	瑞穂面瑞穂里小学校			
6	18	移動、宿舍	黄登	群山府					
6	18	講演		群山			小学校生徒		
6	18	午餐		群山					府尹（府長）天野喜之助の厚意
6	18	公会講演		群山	（当地）発起：天野府尹、教育副会長 佐藤政次郎、有志家 中繁萬吉、等	小学校			（当地）奔走 小学校長 井澤宇三郎、東本願寺布教所主任 木戸光観
6	18	講話		群山	主催：仏教各宗協和会 発起：各宗布教師	東本願寺布教所			
6	19	移動	群山	全羅北道全州					

6	19	昼食			全州			道長 官李軫鎬、第一部長 大久保到、学務主任 守山 五百足、等と昼食
6	19	講話		全州	主催： 發起：道亨諸氏	公会堂	生徒	奔走：東本願寺布教師 加藤良英
6	19	講話		全州	主催： 發起：教育会 道亨諸氏	公会堂	公衆	奔走：東本願寺布教師 加藤良英
6	19	拜觀		全州				李王家の廟を拜觀
6	20	移動	全州	裡里東 本願寺 布教所				
6	20	講話		裡里	發起：布教所主任 廣 幡慶人	東本願寺布 教所	婦人会	
6	20	公会演説		裡里	發起：郡主 朴榮啓、 分隊長 吉田竹治、等	劇場裡里座		
6	20	移動、宿舍	裡里	金堤				
6	20	開演		金堤	發起：教育界長 平富 榮一、校長 並河茂、等	小学校		
6	21	移動、宿舍	金堤	全羅南 道木浦 駅				歡迎：府尹 橋本豊太 郎、警察署長 林和一、を 始めとし 50～60 名

6	21	開演			木浦		小学校講堂	聴衆満場 千人 揮毫希望者 は京城に次 ぐ好成绩	尽力 : 東本願寺別院輪 番 松林深慧 助力 : 別院総代 藤森 利兵衛、亀屋升吉
6	22	講話			木浦		別院	愛国婦人会 及婦人法話 会	
6	22	移動	木浦	樂山浦					
6	22	開演			樂山浦		本願寺布教 所		布教師 藤野最秀
6	22	移動、宿舎	樂山浦	全羅北 道光州					
6	23	開演			光州	發起 : 長官 宮本又 七、郡主 全楨泰、学務主 任 下坂重行、面長 松田 徳次郎	小学校		
6	23	講話			光州		曹洞宗脈源 寺	愛国婦人会	奔走 : 愛国婦人会支部 員 押村光男、東本願寺布 教員 本庄豊二
6	23	移動、宿舎	光州	松汀里					
6	23	夜会			松汀里	發起 : 学校管理者 宮 脇丈八、校長 黒田津作、 本願寺布教師 熊倉了榮	小学校		

6	24	移動、宿舍	松汀里	忠清南道大田				
6	24	講演			大田	依頼：大田教育界の依頼 發起：郡主 金昌洙、 面長 内藤氏雄、郵便局長 永谷武次郎、等	本願寺布教所	尽力：布教所主任 林 大行（旧哲学館出身者）
6	25	講話			大田		本願寺布教所	中学校長 關本幸太郎、小 学校の生徒 播本常次
6	25	講話			大田		普通学校	朝鮮人生徒 校長 中村藤太郎
6	25	移動、宿舍	大田	慶尚北道大邱府				
6	25	講話			大邱		軍人集会所	
6	26	講話			大邱		軍人集会所	
6	26	講話			大邱		高等女学校	校長 起鹽隆親 配意：第一部長 吉松 憲昭、中学校長 高橋亨 （同郷）、 尽力：東本願寺布教師 照岡祐兼、 助力：農業学校長 大 西鬼三雄、小学校長 有田 鐵藏、等
6	26	公会に出演			大邱		同集会所	

6	27	移動	大邸	迎日郡 浦項				校長 長森兵次 尽力 : 東本願寺布教師 佐藤彰然
6	27	講演		浦項	発起 : 郡主 李鐘國、 郡書記 浅井誠一郎、山口 重勇、等	小学校		
6	27	講演		浦項	発起 : 郡主 李鐘國、 郡書記 浅井誠一郎、山口 重勇、等	普通校		校長 奥村甚左衛門 尽力 : 東本願寺布教師 佐藤彰然
6	28	移動	浦項	慶州				
6	28	開演		慶州	主催 : 郡主 梁弘默	小学校		校長 村上卯一郎
6	28	巡見		慶州				郡書記 則武定吉 の案内 にて、新羅の遺跡を巡見
6	29	見学、移動、 宿舍	慶州	慶尚南 道馬山 府				朝鮮第一の洪鐘及び陳列所
6	30	開演		馬山	発起 : 府尹 三増久米 吉、書記 山内勉、等	小学校々々堂		校長 行徳暉受
6	30	移動	慶尚南 道馬山 府	昌原郡 鎮海				尽力 一心寺住職 柳説眞
6	30	開演		鎮海	発起 : 署長 安藤正 次、面長 松尾重信、校長 手島一磨、等	小学校		郡げより 書記 鶴殿金一 郎 出張あり
6	30	講話		鎮海		水交社		司令官 東郷吉太郎

7	1	移動	鎮海	晋州				哲学館出身者 上原三四郎 宅にて喫飯 当地尽力者
7	1	喫飯			鎮海			
7	1	講話			晋州	東本願寺布 教所	婦人会	布教師 佐竹圓誓
7	1	開演			晋州	小学校		校長 江上直治 長官 佐々木藤太郎、第一 部長 佐々木正太郎、等皆 出席 尽力 上原、佐竹、江 上
7	2	移動、宿舎	晋州	釜山				輪番 土井慧鯉
7	2	開演		釜山	発起 : 府尹 若松魂三 郎の代わり 副会長 坂田 文吉、中学校長 平山正、 小学校長 遠藤徳三郎、等	小学校	教育会	
7	3	講話		釜山	主催 : 土井輪番 発起 : 石川眞平、上田 勝蔵、等	別院		
7	3	星食の厚意 を受く		釜山				小倉庵 において 庵主 小倉良八 (円了と同村出 身)

7	3	講話			釜山	発起： 駅長 岡村正雄	草梁鉄道倶楽部		
7	3	移動	釜山	京城					

北朝鮮

月	日	区分	出発	到着	地名	発起、主催者	場所	対象	その他
7	4	移動、宿舎	京城	咸鏡南 道元山 駅					京城駅にて 荒浪釋尾日比 眞柄 等と相会 輪番 上野興仁
7	5	講話			元山		普通学校	朝鮮人生徒	校長 曾田弁治郎
7	5	講話			元山		小学校		校長 平岡一男
7	5	開演			元山	発起： 府尹 村地卓 爾、府書記 竹内正枝、上 野	商工会議所		
7	6	移動、宿舎	元山	咸興					
7	6	講演			咸興	発起： 道庁主任 加藤 敏二郎、知覧芳之助、等	小学校	公衆	
7	6	開演			咸興	主催： 布教所主任 長 嶺本誓、惣代 寺本幸太 郎、山田勘七	東本願寺布 教所		終始尽力 長嶺
7	7	講話			咸興		小学校	内地の生徒	校長 平橋麟象
7	7	講話			咸興		普通学校	朝鮮人生徒	校長 河井軍次郎

7	7	会食			咸興			長官 申應熙、第一部長 菱田義民、第二部長 佐藤 榮三、面長 定野秀一、等 十余名と会食
7	8	(巡見)			咸興			咸興邑内の某書房を一覧
7	8	移動	咸興	(船中)				
7	9	移動	(船中)	(船中)				
7	10	移動		清津港				府尹 吉田格之進 を官舎 に訪問するが不在
7	10	開演		清津	主催：有隣会 發起：府書記 今西源 之助、医師 一番ヶ瀬健太 郎、等	小学校	聴衆は堂の 内外に溢る	校長 島崎林次郎
7	11	移動	清津	鏡城				
7	11	講話		鏡城		普通学校		
7	11	巡見		鏡城				長官 桑原八司 の案内 で、城壁城門城楼を巡見
7	11	会食		鏡城				桑原長官、参興官 金寛紘、 第一部長 三田善喜、第二 部長 山崎真雄、郡守 曾 根侃 と会食
7	11	移動	鏡城	羅南				

7	11	開演			羅南	主催：面長 吉田長治 発起：書記 陣内六郎、大木妻平	娯楽館		
7	11	晚餐			羅南				有志家 富塚素一 宅にて 晚餐
7	11	移動	羅南	清津					
7	11	講話			清津		東本願寺布 教所		最初より奔走の労：布 教所主任 武田惠教
7	12	移動	清津	會寧					
7	12	記念撮影			會寧				府尹官舎庭にて記念撮影
7	12	移動	會寧	(船中)					
7	13			元山					
7	13	移動、宿舎	元山	江原道 通川郡 長箭 〔チヤン ゼン〕					上野 とともに、金剛山探 勝の途
7	13	講話			長箭	依頼：至心會 發起：石川左衛門、等	商店 山田 甚作 方		
7	14	移動、宿舎	長箭	杆城郡 溫井里					
7	14	講話					宿所	在留の内地 人	当所に憲兵駐在所あり 所 長 毎熊圓一

7	15	探勝						靈兵二人の案内で、金剛山 第一の奇勝たる萬物相の探 勝
7	16	移動		通川				
7	17	移動		元山				
7	17	講話			元山		元山別院	愛国婦人会
7	18	移動	元山	安邊郡 大本山 釋王寺				
7	18	移動		(釜山 に向け 夜行)				
7	19	移動	釜山	下関				
7	20	移動	博多	(夜行)				
7	21	移動		東京				